

# 語順と特立提示機能に関する試論

## —新規項目の導入形式を手がかりとして—

砂川有里子（筑波大学）

### 1. コンテキストと言語形式

我々は、ことばという手段を用いることによって、きわめて創造的で無限に開かれたコミュニケーションの可能性を手に入れている。しかし、そのための手段であることばは無限に開かれた体系をなすというわけではなく、我々の使う言語形式も、その数は限られものでしかない。そのために、一つの言語形式がコンテキストに応じて異なった機能を果たす、といったことが頻繁に起こりうるし、いくつかの言語形式が微妙に異なる機能を担うために同一のコンテキスト内で競合するという事もしばしば経験する。すなわち、ある言語形式が用いられたからといって、必ずある特定の機能と結びつかねばならないといったものではないし、あるコンテキストが与えられたら、必ずある特定の言語形式を用いなければならないということもないのである。このように、言語形式と談話機能とは一対一対応で結びつくものではない。そのため両者の関係は非常に捉えがたいものとならざるを得ず、言語学者の内省や直観だけに頼って研究できる領域をはるかに越えることになってしまうのである。

しかし特定のコンテキストにおいて競合するいくつかの言語形式を数量的に観察してみると、明らかな偏りが見られる場合が少なくない。Garcia(1991)やMyhill(1992)たちが主張するように、実際の言語使用に見られるこの種の数量的な偏りのありかたを分析することによって、言語形式と談話機能との関わりの糸口をつかむことが可能となる。

・・・異なった言語単位（すなわち異なった意味）が異なったコミュニケーションに用いられるということならば、それらは必然的にある特定のコンテキストに偏って現れるはずである。しかし、メッセージにとって意味と

いうものが間接的な関わりしかもてないということを考えると、この偏りは決定的に白黒をつけられるような類のもの（つまり相補分布をなすもの）としては現れない。無限に開かれたことばのコミュニケーションに、そのような厳格な規則は適応できないのである。我々が求め、さらに観察することができるのは、ここで明らかにしようとしている言語使用に関わる数量的な偏り (quantitative skewing of usage) である。(Garcia 1991:38)

ここにも述べられているように、この種の研究は、厳密に定式化できる言語規則の解明にではなく、従わなかったとしても必ずしも制裁を受けることにはならない緩やかな約束事としてのコミュニケーション原理の解明に、力を注ぐことになる。

語順の原理の問題も、その一例として位置づけることができる。Gundel (1988)は、語順に関わる原理として、'Given Before New Principle'と'First Things First Principle'という二つの原理が存在するとし、これらの原理の関わりを解明を試みた。前者は「予測可能性の高い情報のほうを先に述べよ」、後者は「緊急な情報を先ず述べよ」という原理であると言い換えることができる。'Given Before New Principle'はブラーク学派が提唱し、その後言語研究者たちの間で広く受け入れられるものとなっていたが、Givón(1988)はその主張をくつがえし、'First Things First Principle'のほうの世界の言語に普遍的に見られる語順の原理であると主張した。

一方、数量的な類型論の多くの研究成果を踏まえたMyhill(1992)は、語順の特性という観点から世界の言語が大きく五つのタイプに分類できること、そしてそのうちの自由語順を取るものやV S語順が好まれる言語に関してはGivónの主張が通用するが、そうでない言語に関してはむしろブラーク学派の主張の方が当たっていることを明らかにした。日本語は、Myhillが第五のグループに分類したS O V語順の言語であるが、数量的研究の少なさからMyhillはこのグループの詳しい分析は避けている。

砂川(1994,1995a)は、コピュラ文という限られた構文に関してのみの言及ではあるが、日本語が上記二つの原理を両方ながらに持つ言語であること、さら



のが'Persistent Referent Last Principle'である。これはすでに述べたように、次に続くことになっている項目をなるべく文の終わりの方に配置せよという原理で、上例下線部の「対流圏」はこの原理に従って文の後方に配置されている。このように下線部の表現は、先行文脈を引き継ぐ項目は前の方に、後続文脈に引き継がれていく項目は後ろの方に配置するという配列になっており、「関連する情報はなるべく近くに配置せよ」という関連性に関わる語順の原理を満たしている。

一方、'First Things First Principle'のほうは、'Given Before New Principle'と衝突する可能性が高い。緊急な情報、すなわち焦点情報は、予測可能性が低く活性化されていない情報である場合が多いため、そのようなときは二つの原理が衝突することになる。その場合、言語の線条性という制約から二つの原理を同時に満たすことは不可能となり、どちらかを優先させて他の一つはあきらめなければならない。我々が文章を推敲する過程で「は」を用いるか「が」を用いるかで悩んだり、どの句を文頭に持ってくるかで迷ったりするのも、複数の原理間の衝突のために一方を選択しなければならないことから生じるものである。そのような談話例を一つ紹介することにしよう。

- (2) ミス・ラロップは、50歳でこの世を去った。死因は若い頃から苦しんだ貧血であった。彼女が死んだ後には、1万1千匹のマウスが残された。(「母の写真」文藝春秋)

この例の下線部では、先行文脈で言及された「ミス・ラロップの死」という内容から十分に予測可能な「死因」という項目が文頭に用いられている。しかしこのコンテキストでは、聞き手の心に喚起されるだろうと想定される疑問、すなわち「ミス・ラロップはなぜ死んだのか」といった問いを先取りする形で、その答えの焦点情報となる「貧血」を文頭に持ってくることも可能である。

- (3) ミス・ラロップは、50歳でこの世を去った。若い頃から苦しんだ貧血が原因であった。彼女が死んだ後には、1万1千匹のマウスが残された。

どちらを選択するかによって後の談話にどのような影響が及ぼされるか、ある

いは談話の解釈にどのような違いが生じるのかという問題に関しては、さらに詳しい研究を待たなければならない。

以下においては、語順の原理と関係の深い特立提示機能を持つ形式として、存在文とコピュラ文を取り上げ、この二つの形式が新しい項目を談話に導入する際の振る舞いを観察することを通じて、特立提示機能と語順の原理との関わりを探っていきたいと思う。

## 2. 特立提示機能

Hetzron(1975)は、文の中の一つの要素に対して特別の注意を喚起して後に想起させやすくする機能を特立提示機能(presentative function)と呼び、その機能がさまざまな言語の特定の形式によって担われていることを明らかにした。

Hetzronによれば特立提示機能の形式が多く用いられるのは次の三つの場合である。

- (1) 後続の談話の中でその要素が間接的あるいは直接的に再び用いられるとき。
- (2) 後続の談話で述べられる事柄が、その要素と関連のある事柄であるとき。
- (3) 現実世界において起ころうとすることや行われることとその要素が何らかの関連があるとき。

この種の機能は、文が正しいか間違っているかといった厳格な文法規則ではなく、より緩やかなコミュニケーション原理に従うものである。したがって、特立提示機能を持つ言語形式が用いられたからといって、必ずしも(1)～

(3)の要件が満たされなければならないといったものではない。当の項目やそれと関連のある事柄が後続の談話に現れるかどうかということは、傾向性の問題として捉えるべきことがらであり、後続文脈でどのような内容が述べられることになるかという問題とは独立に、特立提示と言うことが、提示を受けた項目を聞き手に深く印象づける役割を果たし、後続文脈でその項目に言及する場合に聞き手の負担が少ない形で円滑に導入できる態勢を準備する役割を果た

しているのである。

以上のような特立提示機能をもつ構文を日本語の書き言葉を資料として調べたものに砂川(1995b)が挙げられる。これは短い解説文を対象としたパイロット調査の報告で、特立提示機能を持つ形式を網羅的に調べたものではない。しかし、調査した資料の限りにおいては、存在文とコピュラ文の二つの構文が特立提示機能と強い結びつきを表すという結果が明らかになった。次にその概要を述べ、特立提示機能と語順との関係を探ることにしたい。

### 3. 談話主題の導入形式

砂川(1995b)の調査は家庭の主婦向けに書かれた平易な解説文「クスリに関する11章」(「暮らしの手帖54」1995年2・3月号)という1万3千字弱の文章を対象として行われた。そこではひとまとまりの談話の中で複数の節に渡って指示されている項目を談話主題と呼び、それが談話に初めて導入されるときの節の形式を観察した。その結果、談話主題を導入するものとして目立って多く用いられた構文が存在文とコピュラ文であった。存在文は全部で32例観察されたが、そのうちの18例が、またコピュラ文は21例のうちの10例が談話主題を導入するために用いられている。そのほかの構文としては、動詞文、形容詞文、ハガ構文などが認められたが、文章全体でこれらの構文が使われている割合からすると問題にならないほどの数であり、存在文とコピュラ文が談話導入の形式として際だって高い比率を占めていることが明らかになった。

語順に関してしてみると、存在文の場合、18例のすべてが動詞の直前に主語名詞句を置いていた。

- (4) 例えば、胃酸の分泌をおさえ、痙攣を鎮めるためにアトロピンというクスリがありますが、それは目の筋肉にも働いて、瞳をおさえていた筋肉の緊張をゆるめてしまうために、...

線で囲った部分が新規に導入された項目で、それが後続の波線部で再び繰返して用いられている。また、存在文が位格を伴う場合は、次に示すように必ず

「位格→主語」の語順となっている。

(5) 人間のからだの中には、からだの具合が悪いときには、もとにもど

そう、という力があって、それが私たちのからだを保っています。

存在文が最も安定した語順として「位格→主語」の順になることは、三上(1960)、Kuno(1971)、佐伯(1976)などの研究によって早くから指摘されていることではある。しかし、それが存在文にとって最も普通の語順であるのはなぜなのかといったこと、つまり存在文にある特定の語順が優先的に用いられることの動機について、十分な説明がなされてきたとはいえない。

日本語は、動詞を文末に位置づけるということに関しては非常に固い語順をもつ言語である。そのため、名詞句を最も文末近くに位置させようとした場合は、倒置文というきわめて有標な語順を取る以外では、動詞の直前に置かざるを得なくなる。一方、新規の項目を導入するには、その指示対象物の存在を述べるのが手っ取り早い方法である。さらに、その項目を次の談話に引き続き語りついでいくためには、'Persistent Referent Last Principle'にしたがって、なるべくその項目を文の末尾に近い位置に配置するのが好ましい。これらの要請を同時に満たすために、存在文という構文が用いられているのである。

Hetzronによれば、特立提示という特徴は歴史的な変遷の過程では存在文に最も多く見られるということである。存在文が特立提示機能を担うという現象は、共時的にもおそらくかなり多くの言語に観察されるものであろうと思われる。そしてそこに見られるのは、特定の名詞句をなるべく後方に移動しようという共通の動機であり、'Persistent Referent Last Principle'の発動である。

この原理はコピュラ文においてよりいっそう明確な形で実現される。コピュラ文とは、「～は～だ」「～が～だ」という形と、分裂文といわれている「～のは～だ」「～のが～だ」という形の4つのタイプの文のことをいう。今回の調査で談話主題導入のために用いられていたコピュラ文は、以上4つのタイプを合わせてもわずかに10例と数はきわめて少ないが、そのどれをとってみても、主語名詞句は後続の談話に持続せず、述語名詞句、すなわち文末近くの名詞句の方が後続談話に持続しているのである。

以下にコピュラ文の内訳と各タイプの用例を挙げることにしよう。線で囲った部分がいずれも述語名詞句であり、さらにそれが後続文脈に持続していることに注目していただきたい。

(6) 「～は～だ」 2例

クスリは体にとっては毒物ですから、肝臓はクスリの形をかえて解毒し、からだの外に出そうとします。

(7) 「～が～だ」 3例

一方あげるのと同時に、調節するために下げる機構も働いているわけで、こちらの働きが**い**ぶってきても、血圧はだんだんあがってしまいます。これが本態性高血圧で、ある程度年をとってくると、血圧は自然にあがってきます。/こういう本態性高血圧のときは、アンジオテンシン変換酵素阻害薬というようなものがあります。

(「/」は段落の境目を表す)

(8) 「～のは～だ」 4例

それから注射薬でないといけないのは緊急のときです。口から飲むクスリは胃から腸へいって吸収され、肝臓を通して血液中に入るまでに、15分から30分くらいかかりますから、すぐに処置しないと行けない、というときには間に合いません。

(9) 「～のが～だ」 1例

それをもっと徹底させたのがカプセル剤です。(♢)腸溶剤といって、胃の酸でこわれないように、顆粒剤をゼラチンのカプセルで保護したものもあります。(「♢」は名詞句の省略を表す)

Hetzronは、特立提示機能の一つの実現手段として特立提示移動(presentative movement)を挙げている。これは、特立提示を施す名詞句を文の後方に移動するという操作である。さらに、この移動が世界の言語に普遍的に見られるものであることを主張している。砂川の今回の調査を見る限りでは、Hetzronの主張の正しさは支持されている。しかし、砂川による他の調査では別の結果が出ていることも報告しておかなければならない。

砂川(1994)は、「AはBだ」と「AがBだ」という二つの形式のコピュラ文のうち、同定文(坂原1990)と認定されたものについて、A・B各項の後続談話における持続の有無を調査した<sup>1)</sup>。また、砂川(1995a)では、分裂文「AのはBだ」や「AのがBだ」に関して同様の調査を行った<sup>2)</sup>。こちらの調査の方は対象を同定文に限定せず、上記の形式を持つすべての分裂文に渡っての調査である。これらの調査は、項目が新規に導入された場合だけに限ったものではないために、今回の調査との単純な比較は慎まねばならない。しかし、「AはBだ」と「AのはBだ」という二つの形式に関しては、今回の調査と同じ傾向が認められた。すなわち、どちらの場合も文末に近いB項の方に予測可能性の低い名詞句が用いられ、それが後続文脈に語りつがれていく可能性が高いという結果を得たのである<sup>3)</sup>。

一方、「AのがBだ」に関しては、B項が語りつがれていく可能性が高いという結果は得たものの、その名詞句の予測可能性については、予測可能なものとそうでないものがおおよそ半々の割合で分布しているということが明らかとなった<sup>4)</sup>。さらに、「AがBだ」の形式にいたっては、B項が後続文脈で語りつがれていった例は32%しか観察されず、しかも、その他三つの形式とは対照的に、B項に予測可能性の高い名詞句が用いられる可能性が高いことが分かった。また、この形式に特異に認められたもうひとつの特徴として、B項だけでなく文頭近くに位置するA項のほうも極めて高い予測可能性を示したということ、そして、A項のうちの半数近くが後続文脈に語りつがれていっているということも明らかとなった<sup>5)</sup>。

それに対して砂川(1995b)の調査では、コピュラ文10例のすべてに渡ってB項のほうに予測可能性ゼロの新規項目が現れ、それが後続文脈に語りつがれていっている。そのうちの3例は「AがBだ」の形式を持つ文であるから、その点においては上に紹介した砂川(1994)の調査と明らかに食違う結果を示しているのである。

ここで想起しなければならないことは、冒頭にも述べたように、言語形式というものが特定の一つの機能としか結びつかないといったものではなく、いく

つもの機能を担う可能性があるということである。そこで、「AがBだ」という形式に関しても、いくつかの異なった機能を担っていることを疑ってみる必要がある。

この点に関して、砂川(1996予定)は、一つの可能性を示唆している。砂川は「AがBだ」という形を持つ同定文を、B項を後続文脈に持続させるために用いるタイプとA項を卓立させるために用いるタイプの二つに分け、前者を「話題設定型」、後者を「主語卓立型」と名付けている。話題設定型のタイプとは、先行文脈を引き継ぐ予測可能性の高いA項を介在させることによって先行文脈と関連のある形で新規の項目や以前語られたことのある項目を文末近くのB項の位置に配置し、それを後続文脈で語りつぎやすくするために用いるタイプである。一方の主語卓立型のタイプとは、前提情報となっているB項をA項によって同定するとともに、その項を卓立するために用いるタイプである。この場合、A項には予測可能性ゼロの新しい項目が用いられる場合もあるが、直前の文脈を受けたきわめて予測可能性の高い項目が用いられることも少なくない。Hetzronは特立提示機能を「文の中の一つの要素に対して特別の注意を喚起して後に想起させやすくする機能」と規定しているが、聞き手の記憶に残りやすくすることが、後の談話に語りつがれやすくする条件を整えることになるということを考えるならば、特定の名詞句を卓立させるということのも特立提示につながる働きの一つであると言えるのではないかと思われる。すなわち、特立提示を行うためには、一つには文の後方に位置づけて、後の談話との関連性を保ちやすくする方法があるが、もうひとつは文の前方に位置づけて卓立させることによって聞き手の記憶に残りやすくするという方法もあるということである。砂川(1994)の調査で「AがBだ」のA項のうちの半数近くが後続文脈においても語りつがれているということは、その現れなのではないかと思われる。しかし一方で半数以上のA項が語りつがれていないことは、卓立という機能に特立提示以外の動機も関わっていることを示差している。いくつかの機能を担わなければならない言語形式の複雑なありようがここにも認められるのである。

## 注

- 1) 書き言葉の資料から採集した「AはBだ」93例、「AがBだ」122例を対象に調査を行った。
- 2) 同じく書き言葉を対象に、「AのはBだ」190例、「AのがBだ」102例について調査した。
- 3) 「AはBだ」「AのはBだ」のどちらも、B項は9割弱のものが予測可能性ゼロと認定された。また後続文脈におけるB項の振る舞いに関しては、「AはBだ」の83.9%、「AのはBだ」の65.8%が語りつがれるという結果を得た。
- 4) 「AのがBだ」のB項は64.7%が後続文脈で語りつがれている。また、B項のうち予測可能なものは56.8%、予測不可能なものは43.2%であった。
- 5) A項の89.3%が予測可能性の高い名詞句であり、45.9%が後続文脈に語りつがれている。

## 参考文献

- Garcia, E. C. 1991. Grasping the nettle: variation as proof of invariance. in L. R. Waugh et al. eds., *New Vistas in Grammar: Invariance and Variation*: 33-59. Amsterdam: John Benjamins.
- Givón, T. 1988. The pragmatics of word-order: predictability, importance and attention. in M. Hammed et al. eds., *Studies in Syntactic Typology*. 234-284. Amsterdam: John Benjamins.
- Gundel, J. K. 1988. Universals of topic-comment structure. in M. Hammond et al, eds., *Studies in Syntactic Typology*: 209-239. Amsterdam: John Benjamins.
- Myhill, J. 1992. *Typological Discourse Analysis*. Blackwell: Oxford.
- Hetzron, R. 1975. The presentative movement or why the ideal word order is V.S.O.P. in C. Li ed. *Word Order and Word Order Change*: 347-388. Austin: University of Texas Press.

Kuno, S. 1971. The position of locatives in existential sentences. *Linguistic Inquiry*  
Vol. II, No. 2: 333-378.

三上章. 1960. 「象は鼻が長い」くろしお出版。

佐伯哲夫. 1976. 「語順と文法」関西大学出版。

坂原茂. 1990. 「役割、ガ・ハ、ウナギ文」日本認知科学会編「認知科学の発展」第3巻：29-66. 講談社

砂川有里子. 1994. 「コピュラ文と語順の原理：「AはBだ」と「BがAだ」」国語学会平成6年度秋期大会要旨 103-109.

砂川有里子. 1995a. 「日本語における分裂文の機能と語順の原理」仁田義雄編「複文の研究」353-388. くろしお出版。

砂川有里子. 1995b. 「談話主題の導入形式に関する研究ノートー存在文とコピュラ文の特立提示機能についてー」『文藝言語研究（言語篇）』28:41-51.

砂川有里子(1996予定) 「日本語コピュラ文の類型と機能ー記述文と同定文ー」『小泉保教授古希記念論文集（仮題）』大学書林。